

オリエンテーション・ 導入：近代キリスト教と政治思想

1. 無教会キリスト教の諸問題

2. 波多野宗教哲学の射程

- 2-1：弁証神学から宗教学・宗教哲学へ
- 2-2：波多野宗教哲学の挑戦
- 2-3：波多野宗教哲学の射程 6/30
- 2-4：他者論——波多野とレヴィナス 7/7
- 2-5：象徴論——波多野とティリッヒ 7/14
- 2-6：日本キリスト教思想研究の課題と可能性 7/21

Exkurs 1：戦後70年の教会と神学——組織神学の場合

Exkurs 2：ハイデッガーとキリスト教 7/28

フィードバック

<前回>波多野宗教哲学の挑戦

(0) 波多野精一の概略

(1) 生涯

(2) 波多野宗教哲学の形成過程

11. 波多野宗教哲学自体の形成過程：40歳で京都帝国大学に教授として着任してからの20年間。

- ・宗教哲学の土台は、早稲田時代にはほぼ確立。『西洋哲学史要』『基督教の起源』。哲学史におけるカントの批判哲学と、イエスあるいはパウロの宗教的体験との意義が明確に意識されていたこと、そして思想史が哲学と宗教とを包括するものとして理解されていた。
- ・宗教哲学体系の形成：
 - 第1期（宗教哲学形成の胎動期）1917年の京都赴任から1926年（大正末）頃まで。1920年の「宗教哲学の本質及其根本問題」の前後で時期を区切る。
 - 第2期（研究の緒が見出され体系の原理が築かれた）
 - 第3期（完成期）1935年から43年

12. 波多野の宗教哲学構想を導く2つの問い：

- 1) 近代以降の思想状況において従来の宗教哲学を乗り越える宗教哲学の哲学的基礎はどこに求められるのか。宗教「哲学」。
- 2) 宗教自体の要求に適切に応答する宗教哲学とは何かという問い。「宗教」哲学。

↓

- 1) に対する結論：「正しい宗教哲学」はカントの批判哲学の上に構築される。第一期の前半には到達されていた。

(3) 近代の知的状況と宗教哲学

14. 「誤れる宗教哲学」→「正しき宗教哲学」

- ・思想世界が啓蒙主義の決定的な影響下にあった近代という時代にあって、宗教を積極的に論じること。
- ・実証主義的の理念にしたがった宗教学（＝現代宗教学）：宗教心理学

15. 自然主義に陥った実証主義的宗教研究：「必然的帰結として宗教の否定に導く」、「宗教の事実を曲解しその真相を歪曲する」（『宗教哲学序論・宗教哲学』岩波文庫、16頁）実証主義は認識論的相対主義を帰結することによって、宗教的体験が志向する体験の実在性（志向対象の絶対的実在性・神聖性）の意味を正当に扱うことができない。

- ↓
- ・「事実性」の問い直し。事実は意味あるいは理解と関連することによってはじめて、知の対象となる。いわゆる「生の事実」といったものは人間の経験においては存在しない。
- ↓
- 経験的な事実に基づく宗教と、その反省的自己理解としての宗教哲学は、実証主義的な方法論に基づく宗教研究（たとえば、宗教心理学）においても、その意味を失うことはない。
16. 『宗教哲学序論』で「誤れる宗教哲学」と呼ばれる合理主義的宗教哲学の立場。
 神を直接の理論的な認識対象とする哲学、その意味で、「神の学」。それは、アリストテレス以来「神学」と呼ばれ、キリスト教の神論においても採用された立場、その典型として挙げられるのが、神の存在論証を含む自然神学（アンセルムスとトマス・アクィナス）。
- ↓
- カントによる神の存在論証批判により、伝統的な自然神学は近代以降の知的状況においてその妥当性を失った。
- 神の存在論証は論証ではなく人間における宗教的問いの表現である。ティリッヒ。
17. 正しき宗教哲学：神自体を理論論証の対象とする哲学ではなく、人間の事柄としての宗教、人間の生における宗教の可能性と現実性を論じる哲学。
19. 『宗教哲学序論』の「正しき宗教哲学」とそれに基づく『宗教哲学』の体系的叙述。
 「宗教的体験の理論的回顧その反省的自己理解」＝批判哲学＋実在論
20. カントの批判哲学にこそ宗教哲学が辿るべき「正しい道」が見出される。
 ・「宗教哲学の本質及其根本問題」（1920）
 カントは、「歴史においてその具体的内容を実現する文化の諸領分に関して、その理性における根拠、その各に一定の意味、一定の価値を与える原理を研究する」（『時と永遠他八篇』岩波文庫、279頁）という批判主義の根本精神を、まず認識論において確立し、「次第に道徳や美的生活の領域へ、同じ態度、方法の適用を広めていった」。
- ・「批判主義の宗教哲学は、主理主義的形而上学や超自然主義のそれと異って、宗教の対象の哲学的考察ではなく、宗教そのものを対象とする哲学である」（『宗教哲学序論・宗教哲学』岩波文庫、二八〇頁）。
- 人間の営みとしての宗教を対象とする宗教哲学構想は宗教哲学の人間学化あるいは人間学的転回（パネンベルク）
21. シュライアマハーの「高次の実在論」にしたがい、宗教的実在論に立った宗教哲学の構築を試みる。→ 解釈学
- ・神ではなく宗教、つまり宗教的体験が宗教哲学の対象。
 - ・宗教的体験＝宗教哲学が前提とすべき事実。この事実を人間存在における意味との関わりにおいて解釈する。
 - ・波多野宗教哲学の対象とする事実が意味を内包する事実であることから、宗教的体験の「理論的回顧その反省的自己理解」という解釈学的作業が帰結する。
- （４）波多野宗教哲学の構成・内容**
23. 『宗教哲学序論』「第三章 正しき宗教哲学」（同書、84-108頁）。
 宗教哲学体系の本論と各論：宗教本質論／類型論／人間学
 cf. ティリッヒの学の体系論：宗教哲学／宗教史／規範的体系的宗教学
 相關の方法：哲学的人間学／宗教的象徴の解釈学
24. 宗教本質論＝波多野宗教哲学体系の中心：「宗教哲学の問題は簡単にいえば本質論に尽きる」（同書、95頁）。

S. Ashina

「すでに論じた如く宗教の学的研究は事実の内面的意味を前提にせねばならぬ。この内面的意味は体験において与えられまた知られる。合理主義の宗教哲学と異なって正しき宗教哲学は宗教的体験の反省的自己理解、その理論的回顧として成立つ。体験の立場に立つものは宗教が他と混同を許さぬ固有の意味内容を有するを知る。かかる意味内容を反省に上せ、その理論的理解を原理へと推進めて行くものは本質の観照把握に到達してはじめて満足を見る。この本質的理解こそ宗教哲学である。」（同書、84頁）

宗教的体験→ 理論的回顧→反省的自己理解→「本質の観照把握」

現象学の本質直観に相当する作業。

25. 歴史的な個別的な現象（体験とその表現）から類型を経て本質に至る過程の中に、この本質直観は位置づけられる。波多野宗教哲学は現象学的である。

26. 宗教の本質理解の内容：

『宗教哲学』の第一章の冒頭において、シュライアマハーの「高次の実在主義」と関連づけつつ、「宗教において自我は現実世界を超えて遙かに高き実在との関係に入る」（同書、171頁）。つまり、高次の実在との関係・交わりこそが宗教の核心を構成するものであり、波多野は、この実在を愛の関わりにおいて人格として出会う他者、神聖性を有する絶対的他者として説明してゆく。

27. 宗教類型論：本質直観がなされるべき直観の素材（典型的事例）を与える。

28. 哲学的人間学：絶対的他者の意味を明らかにするには、人間的生のあり方を他者関係において解明する。

「更に立ち入っていかなる具体的論究が行われるかを考察すれば本質論と関連しつつまたそのうちに包含されつつ、ここに比較的独立なる研究の部門を構成する諸問題がおのずから別れ出るのを見る。類型論的と人間学的との二つの研究が即ちそれである」（同書、95）。

29. 宗教的類型論：新カント学派（ヴィンデルバントやリッケルト）の類型論やウェーバーの社会学的類型論。

類型は、個性と普遍、あるいは個体と本質との中間に位置し、媒介的意義を有している。一方で、類型は個性に対しては普遍の側に立つが（「類型は事実の比較によって得られる抽象的産物」、他方同時に「飽くまでも個性を指ざし個性の香りを留める」）。

類型：歴史的事実から類型を介して本質へという上昇的思惟と、本質が類型を介して歴史の世界に具体的形態において反映するという下降的思惟との双方の思惟の運動が交差する場。

30. 人間学：カントやシュライアマハーの古典的な議論が存在することはもちろんであるが、より直接的には、シェラー、ハイデッガー、そしてブーバーの哲学的人間学が意識されている。

Exkurs 1 :

戦後70年の教会と神学——組織神学の場合

（1）はじめに——組織神学とはいかなる学か

1. 戦後70年の日本の組織神学の歩みを振り返り、今後を展望する。

組織神学の歩みを振り返るためには、まず組織神学の輪郭を確定することが先決問題である。まさにここに現代の組織神学が直面する苦境・危機がある。

2. ティリッヒ『組織神学』（第一巻・序論の議論）：

資料の種類に依存しない。組織神学の使用する資料がほとんど無制限に豊富であり、「聖書、教会史、宗教史、文化史」の諸テキストや諸事象のすべてが組織神学に関連づけられ得る。

3. 北森嘉蔵『神の痛みの神学』(1946)

取り上げられた資料との関わりで聖書神学や歴史神学に数え得るとしても、聖書やキリスト教史に関連する資料の多さは、組織神学であることと矛盾しないからである——むしろ、「神の痛み」が資料を関連づける規範として設定されている点で、優れて組織神学的である——。

4. 近藤勝彦「組織神学」(『岩波キリスト教辞典』)

組織神学：教義学、倫理学、弁証学(19世紀)

「組織神学」：16世紀～17世紀のプロテスタント的な学問状況で成立。

↓

体系の具体化は現代神学でも多様。

5. 神学：「現代」(状況)と自らが立つキリスト教的伝統(メッセージ)との両極構造。

↓

「問いと答え」、経験

「組織」「組織化」：組織化を行うための視点→規範(Norm)

聖書を中心に多岐にわたる諸資料を一定の規範にしたがって統合し、議論を行う。

6. 規範と教派的伝統：特に近代プロテスタティズム

古代ギリシャ教会の「不死の生命と永遠の真理との受肉による有限の人間の死と誤謬とからの解放」の規範、ローマ教会の「神人の現実的で sacramental な犠牲による罪と壊滅とからの救済」の規範、「信仰による義認」と「聖書原理」とからなる宗教改革的規範(カルヴィニズムでは「予定説」の強調を伴う)、近代プロテスタティズムの「人間存在の人格的、社会的理想を表す『共観福音書』のイエス像」、20世紀プロテスタントの「旧新約聖書における預言者的な神の国のメッセージ」。そして、ティリッヒの組織神学では「キリストとしてのイエスにおける新しい存在」。

7. 諸規範の関連性：相互に排他的なものではなく、伝統に規定されたキリスト教的規範の内部における強調点の多様性。

(2) 戦後70年の組織神学の動向

・バルト神学に規定された状況

→ 争点・テーマ・方法・視点の多様化へ、あるいは混沌

8. 戦後70年の組織神学。『日本神学史』(ヨルダン社)第二章で佐藤敏夫は、次のように論じている。

「戦前の一〇年間(昭和一〇年代)を振りかえってみると、そこに見出されるものは、バルト神学の圧倒的影響力」であり、「一種のバルト神学の正統主義化が生まれた」(120)。

「戦前から出発した神学は、このこととの連関において理解されねばならない」が、特筆すべきは「正統主義化されたバルトをどう乗り越えようとしたか」であり、その代表が北森嘉蔵の『神の痛みの神学』なのである(121)。

9. バルト神学の規定する問題状況(バルト神学の正統主義化とそれに対する反論)。

プロテスタント神学の動向(の一部)を中心にした見方。

10. 日本組織神学の成果：日本基督教学会『日本の神学』に書評が掲載された組織神学関連文献を参照(<http://www.gakkai.ac/jscs/journal/>)。

11. 『日本の神学』創刊号(一九六二年)で、山本和は、日本における「教理学・組織神学」の戦後史を第一期(一九四五―五一年)、第二期(五二―五六年)、第三期(五七―六二年)に区分。

12. 神学校・神学部での「組織神学」の位置づけ。研究成果の刊行。海外の著名な組織神学者(特にバルト、ボンヘッフアー、モルトマンなど)に関連した翻訳。

↓

- ・日本の組織神学はきわめて盛んであり、活性化されている？
- ・活況のもとで進行する危機。

13. 学会動向が映し出す、組織神学の現状。

日本宗教学会、日本基督教学会、そして日本組織神学会

14. いわゆる「組織神学」的テーマの発表の後退。しかし従来から、海外の著名な組織神学者についての個別的な思想研究がその大半を占めており、日本人組織神学者のオリジナルな思索に基づく組織神学体系は、わずかな例外を除いて、いまだ具体化されていない。

15. 栗林輝夫『荊冠の神学——被差別部落解放とキリスト教』新教出版社。

16. 日本の組織神学は、翻訳を通じた欧米の組織神学の紹介、後追いがその中心を占めている。フェミニスト神学が低調なのはなぜか？

17. 森田雄三郎「現代神学の動向」(『現代神学はどこへ行くか』教文館)

「バルトやブルトマン、あるいはティリッヒやニーバーといったいわゆる大物が存在せず、まさに神学の戦国時代に突入した感がある。」(32)

そして、「六〇年代以後に現われた新しい神学的動向のうち有意義と思われるものだけを挙げるならば」として、森田は、「解釈学としての神学」、「歴史の神学(宗教学・宗教史の神学、科学論の神学)」、「希望の神学・革新の神学(解放の神学)」、プロセス神学の四つの流れを取り上げ、それぞれについて分析。

18. 栗林輝夫『現代神学の最前線——「バルト以後」の半世紀を読む』

新教出版社、2004年。

第1講 はじめに——今、神学で何が起きているのか

第2講 世俗化の神学と「宗教なき神学」のキリスト教——アメリカはボンヘッファーを誤読したのか

第3講 黙示録的時代を告げたラディカル神学——「神の死の神学」の誕生とその後

第4講 政治神学は未来の変革を告知する——イエスの想起と終末的希望を語り継ぐ

第5講 黒人神学とアメリカ周縁社会の希望——黒人神学の新世代は何を語るのか

第6講 ポストモダン時代のフェミニスト神学——多様に「女たちの経験」を綴る

第7講 解放の神学は貧しい者を選択する——マルクス主義から民衆の基層文化へ

第8講 アジア神学とポストコロニアルの展望——「文化」、「民衆」、「解放」のキーワードの次に

第9講 宗教の多元神学とグローバル化の危機——紛争の時代に宗教の対話は可能か

第10講 プロセス神学は経済とエコロジーに「進化」する——新古典神論から解放主義へ

第11講 福音派神学とエヴァンジェリカルの伸張——リベラル「崩壊後」の戦略はどこに？

第12講 ポストリベラル神学が語る教会の物語——キリスト教新保守主義のめざすもの

第13講 修正神学の批判的な知の挑戦——革新的キリスト教が語る現代の「神」

第14講 ポストモダン神学の様々な意匠——二十一世紀はポストモダニズム？

第15講 宗教右派は神国アメリカをめざす——統治の神学、キリスト教再建主義、セオノミー

第16講 おわりに——ポストバルトから宗教右派の神学まで

19. +環境破壊、原発事故、テロ、性の多様性

現代の歴史的思想的状況が組織神学に突きつけている問い(→争点)は、科学技術、環境、いのち、性、多元性、国家、戦争など、きわめて多岐にわたっており、組織神学は混沌とした状況にある。膨大な資料を組織化すること、また組織神学の全体的な動向なるものを描くことは、もはや困難。

↓

研究者の関心も実際の仕事も、神学的知の体系化から個別的な諸問題・諸テーマへとシフトする。

↓

過剰な多様化？ 知の専門化と縮小 → 組織神学を陳腐化させ窒息させる。

神学教育における組織神学の困難さ

20. 問題・争点の拡散とそれに伴う組織神学の解体という事態（＝複雑な問題状況を組織神学として統一的に解釈し批判する視点が見出しにくい）。

→ 近代的知の特有のあり方（制度的再帰性とその帰結） → 「規範」の問題

（3）近代的知の状況とその帰結

21. 視野を啓蒙的近代へ、現代までの二〇〇年あまりの間。

「現代と近代の間には明瞭に一線は引きがたい」（森田、32）。

22. アンソニー・ギデンズ『モダニティと自己アイデンティティ——後期近代における自己と社会』ハーベスト社、など。

23. 知の公共性と制度。

司教制度、修道制、そして大学へ。

24. 公の知的世界はいくつかの構成要素を増幅させることによって、大きく変貌する。ギデンズの「制度的再帰性」（the institutional reflexivity）の問題。

25. 再帰性：知の内包される自己関係性・自己参照性

キルケゴール（『死に至る病』）が人間＝精神＝自己を「関係が自己自身に関係するというそのこと」と述べた論点。

↓

近代特有な仕方で「制度化」。

26. デカルトの方法論的「懐疑」。

→ 実証主義的な近代の自然科学において強調される「観察」「実験」と「検証」という手続きは、懐疑の制度化として近代を特徴付ける。

知の確実性は繰り返し懐疑に曝すことを求める。そのための制度化。

近代的知のプロジェクト：繰り返し吟味された確実な知の原理から包括的な知の体系の構築を目指す試み（現代物理学における大統一理論の構想→一切を包括する）。

27. 近代的な知の制度のキリスト教的知に対する影響。

① 神学におけるプロレゴメナ・方法論の肥大化。

組織神学が学的知としての資格を有することを教派的伝統や権威によって根拠づけることはもはや手続き的に許されない。方法論的な緻密な検討をまず行った上ではじめて——たとえば、大木英夫『組織神学序論——プロレゴメナとしての聖書論』（教文館）が行っているような聖書の神学的解釈方法や啓示論などの詳細な論究——、神学体系自体の内容記述に取りかかることができる。

→ 戦後日本の組織神学がまだまだ本格的な神学体系を生み出し得ていない理由の一端。

② 宗教経験との接続を通じた実証性の確保。

近代的知は、観察や実験という方法論手続きが示すように、確実な知であることを示す証拠、つまり表現・言明の実証性を要求する。

組織神学的言明と聖書テキストとの関連づけの実証性、あるいはキリスト教的生を生きる個々の人や共同体の経験との実証的な繋がり（接続）。

→ シュライアマハーの信仰論の構想、近代聖書学におけるイエス伝研究。

S. Ashina

→隣接する諸学問との関連づけにおける神学的知の吟味。十分な包括性を有する神学体系の叙述は、戦後の状況にいたって、個人の手に残るものとなった。

③ 知の公開性（知の公共性の一様態）。

近代的知は、学問成果の公開性を要求する。 cf. 伝統的な宗教の「秘密の知識」（密教）先生から生徒へと伝授され習得が求められた伝統的な学的作法も、マニュアル化され公開されることが求められている。

→ 教派などが蓄積伝承してきた特殊な知識の意味を相対化し、いわば知識を均一化（標準化）。

28. 大学・学会・出版の三者が構成する知の制度的形態。

・研究者の組織的集団としての大学。

・19世紀になり、研究者の組織化は専門領域ごとに「学会」を設立。

知の共有と評価の基準構築（知の標準化）——問題設定と方法論の共有、知の「新しさ」「独創性」の判断基準——。 cf. 近代的知のモデルとしての自然科学

17世紀、イングランドの王立協会。

おおむね19世紀後半以降、比較的最近：日本宗教学会は1930年、日本基督教学会は1952年。

・出版界：大学と学会において生み出され公認された知的成果の公開に対して物質的基盤を提供した。キリスト教思想にとっての出版社・編集者の役割。

29. 近代市民社会の知の制度化（イデオロギー）への学問の適応。

別の制度化は可能か。だれのための学問か。

↓

30. 教派（「普遍的キリスト教世界／諸教派・諸伝統／個人」という中での中間共同体）の役割の変化。

近代的な組織神学的前提・土台 → 近代的知の進展は教派を相対化した。

20世紀、特に後半に著しく進展。戦後70年。

普遍化＝個人化。

教派的伝統を超えた知の標準化は、研究における神学者個人の比重を相対的に高める。

組織神学（体系構築）も第一義的には神学者個人の営み。

↓

組織神学の危機

31. エキュメニズムの進展が教派的伝統をされに相対化。

しかし、教派的伝統が後退する中、いまだエキュメニカルな規範は見出されていない。ここに組織神学の苦境・危機が存するのである。

（4）むすび

32. 戦後70年、そして現代。

環境破壊と原発事故 → 多元性の中での問題解決。

「エキュメニカルな組織神学」の構築という課題：教派的な知の地平を乗り越え、さらには宗教間の対話をも促進しうる神学的知の体系的提示。エキュメニカルな規範の探究。

33. エキュメニカルな組織神学は教派的伝統を単に否定的に乗り越えた先に構想されるのか、あるいは、教派的な伝統はその積極的な意義を保持しつつエキュメニカルな組織神学に貢献できるのか。

啓蒙主義的近代が追求した抽象的な普遍的知とは異なる知の構想とそれにふさわしい制度化。

34. 矢内原忠雄「宗教改革論」：1940年に全体主義の「大きな波」に対して、「若しこの生きた時代の問題に対して基督教が何ら光明を与へることが出来ないものとするれば、基督教は個人主義と共に過去に葬られてしまふべきものだらう」と述べた。

35. 戦後70年：戦前・太平洋戦争と現代との中間＝「長い休戦期間」

＝現代日本が直面しつつある「次の戦いの時」（改憲と原発）に備えるべき時代

→ 「生きた時代の問題に」光明を与えうるか。

36. 現代日本の組織神学の課題。

「長い目で見れば、聖書に基づいて、精神の内面性の深みをいっそう深く探ること、技術社会における人間の生存の問題に正面から応えること、聖書的個人道徳のみならず非神話化された歴史の目標と社会倫理をこれと媒介させて世界平和の確立に貢献すること、これらの三点を満足させる神学、『技術社会の主イエス・キリスト』を思索し抜くことができる神学のみが、現代に生き残ることができるであろう。」（森田、48）